

庄内地域医療連携の会の活動

瀬尾 利加子 氏

庄内地域医療連携の会 事務局長
(所属：鶴岡協立病院 地域医療連携室)

1.庄内地域医療連携の会 設立の経緯

診療報酬改定で急性期入院加算が新設された2000年以降、庄内地域の病院でも紹介率をあげる目的や、地域と病院の地域医療連携の強化のため「地域医療連携室」を立ち上げるところが増えていました。しかし配属となった職員は地域医療連携という「未知の世界」に戸惑い、思い悩む毎日を送っていました。そんな状況でも病院間で患者紹介や様々な問合せを行う事は多く「他の病院の連携室業務を知りたい」「担当者を知りたい」と思うようになりました。問い合わせをするにも「相手と一度会って、顔を知っている」だけでも随分話しやすくなると考えていました。

そこで有志が世話人となり、任意の会として2006年4月に「第1回 庄内地域医療連携の会学習会」を開催しました。(図1)尚、当会の目的と世話人会構成は表1の通りです。



図1

【会の目的(2006年設立時)】

- 庄内地域の病院間の連携を強化するために医療連携担当者である医師、看護師、医療ソーシャルワーカー、事務職員などの意見交換と情報共有の場として設立
- 「地域完結型の医療連携」を考え、患者が身近な地域で症状にあった適切な治療を効率よく受けることが出来暮らしやすい医療環境地域をつくるための医療連携強化の実現

【平成24年度 世話人会と所属】

代表世話人 信夫 松子(順仁堂 遊佐病院)
事務局長 瀬尾 利加子(鶴岡協立病院)
世話人 菊田 健(庄内余目病院)、
黒子 和彦(鶴岡協立リハビリテーション病院)
池田 周史(地域包括支援センター ほくふ)
星山 裕二(介護老人保健施設 ほのか)
渡邊 田鶴子(鶴岡地区医師会 在宅医療連携拠点事業室 ほたる)

【世話人会の特徴】

- 庄内地域(鶴岡市、酒田市、庄内町、遊佐町、三川町)の病院や福祉施設から世話人を選出
- 病院職員だけではなく福祉施設や包括支援センター、地区医師会など様々な分野の意見を取り入れている。

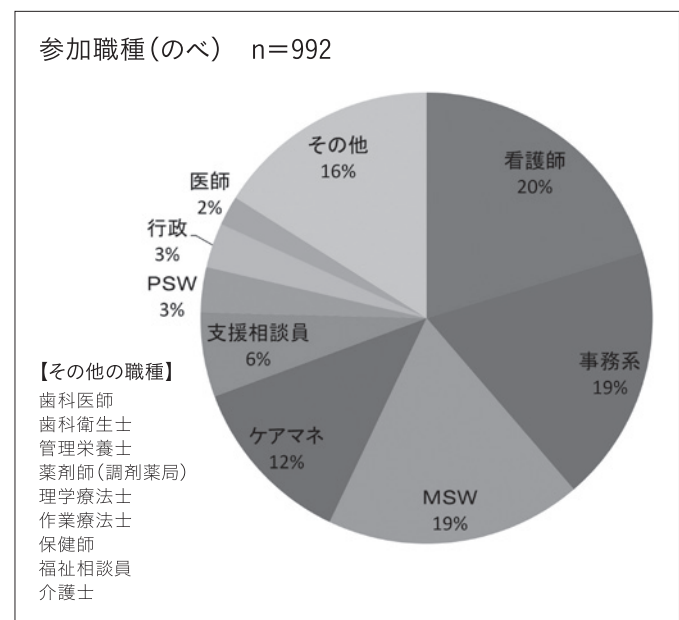
【運営内容】

- 年4回程度の学習会を開催
- 参加者から毎回参加費として1,000円(会場費、講師料、資料代など)
- 随時の世話人会のほかMLで連絡、調整

表1

2.参加職種

対象は医療、福祉や行政の、医師、看護師(訪問看護師含む)、医療ソーシャルワーカー、精神保健福祉士、ケアマネジャーなど多職種です。地域での医療連携に対する意識の変化、強化などの影響により、最近では病院や診療所医師からも参加があります。その他の職種としては、歯科医師、歯科衛生士、管理栄養士、薬剤師(調剤薬局)、理学療法士、作業療法士、保健師、福祉相談員、介護士となっています。(グラフ1)



グラフ1

3.活動内容

2006年4月設立から2011年3月までの開催テーマは表2の通りです。

主に、庄内地域の医療・福祉の連携を強化するための学習会や意見交換を年4回程度開催しています。日常業務の中の様々な問題や課題を共有しながら、地域関係者のニーズや地域状況に合わせ開催テーマを考えています。この会に参加することで他職種の方やスーパーバイザーと出会い多くのことを学び、その後の地域での取り組みに活かすことができるとの声もいただいております。また、病院の基本情報と入院、外来、医療相談の担当者と連絡先を記載した「病院窓口情報冊子」(図2)や、入所施設の「医療依存度の高い方の受入情報」を掲載した冊子作成、病院から病院へ転院相談を行うための「転院相談シート」の作成を行いました。(図3)

開催月	開催テーマ
2006年 4月	設立説明、各病院の連携部門紹介
2006年 7月	病院連携窓口情報冊子、実際の事例と問題点
2006年 10月	山形市立病院済生館における地域医療連携の取り組みについて
2006年 12月	病院と介護老人保健施設との連携について
2007年 4月	今、庄内の地域医療連携に何が必要か
2007年 6月	連携業務と情報の統一化
2007年 9月	医療制度の改革と保健医療計画について
2007年 11月	病院と介護老人保健施設との連携を考える
同日開催	第2回全国連携室ネットワーク連絡会in鶴岡 現地事務局を担当
2008年 4月	日本海総合病院および酒田医療センターの紹介
2008年 6月	退院支援と退院調整を考えよう
2008年 9月	第1回山形県さくらんぼネットワーク(山形県地域医療連携協議会)「テーマ:地域医療連携ネットワークの在り方」を当会が主催
2008年 11月	介護老人保健施設と病院の連携について
2009年 4月	南庄内および北庄内の地域医療連携の現状
2009年 6月	病院・福祉・施設を知ろう パネルディスカッション
2009年 9月	在宅支援について一緒に考えよう
2010年 5月	病院の機能情報を共有しよう～病院窓口情報冊子を元に～
2010年 7月	第3回 山形県さくらんぼネットワーク(山形県地域医療連携協議会)「テーマ:連携に関わる診療報酬改定と実際の連携室業務」を当会が主催
2011年 4月	これからの庄内地区の多職種連携に必要なこと
2011年 7月	高齢者の脱水と水分補給(鶴岡会場、酒田会場2回開催)
2011年 10月	健やかに安心して暮らせる地域をつくろう(ワールド・カフェ形式) ※ワールド・カフェ:人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことができる「カフェ」のような空間でこそ創造されるという考えに基づいた話し合いの手法
2012年 3月	平成24年度診療報酬・介護報酬W改定の傾向と対策 ～地域連携の分野を中心に～

表2



図2



図3

(1)座学ではなく 参加型を目指す

「顔が見える関係の必要性」を様々な所で見聞しますが、当会は設立当初から、「座学」ではなく「参加型」をめざしていました。参加者が相互理解し日常的につながりあう関係が作られるようにグループワークを多く取り入れています。また、地域の状況を把握するためにグループホームや介護老人保健施設、老人福祉施設などからお話を聞く機会も設けました。

医療者以外の職種との意見交換には職種間の意識の壁を取り除く事が必要です。2008年11月に開催した「老人保健施設と病院の連携について」では看護師、ケアマネ、医療ソーシャルワーカーをはじめ、一緒に「連携図と高齢者を自宅の生活に戻す為の連携〇箇条」をテーマに開催しました。グループ1からの発表(図4)によると、「利用者(患者)の満足度をアップさせ、きれいな花を咲かせて、高齢者が自宅生活に戻った連携図」です。真ん中の「花」は本人で、それを支える「茎」はケアマネ。「葉」は医療機関と福祉施設。「太陽」は家族で、本人をやさしく照らしています。鉢のなかには養分たっぷりの「土」(在宅福祉サービス)があります。「蝶」はかかりつけ医でフットワークよく対応してくれます。また定期的に行政より「水」を与えていただいています。これが、高齢者が希望する在宅生活が可能になるための連携図です。」とのこと。7つあったグループの中で、特に好評だった連携図でしたので紹介しましたが、他にも様々な連携図が完成しています。

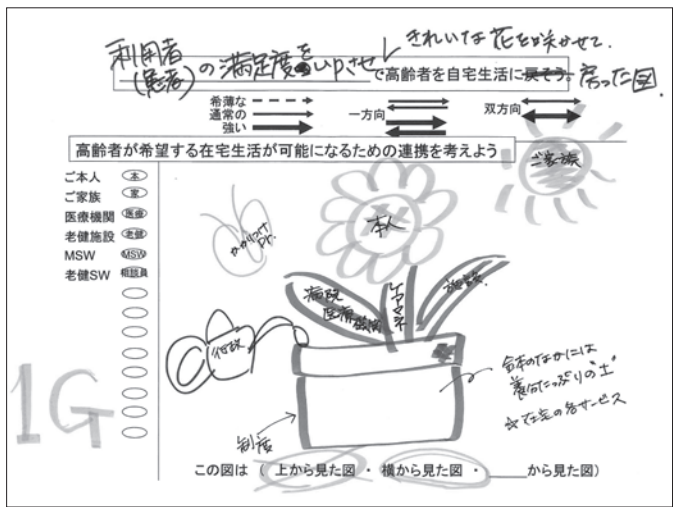


図4

また2011年10月には「ワールド・カフェもどき」を開催しました。誰も「本物のワールド・カフェ」を体験していなかったので参考書片手に準備を進め、いかにゲスト(参加者)を最初から話しやすい雰囲気でお迎え出来るかを相談しました。会場はハロウィン風にディスプレイし、世話人は大きな蝶ネクタイをつけて対応しました。(図5)なじみのない方法でしたが、参加した方々には大好評で、次回開催を望まれています。

こういった「参加型」の企画は、同じテーマについてざっくばらんな意見を出し合い、相手が何を考え、どのような立場で、環境で仕事をしているかを知ることが出来る非常に大事な時間になっています。(図6)



図5



図6

庄内だけではなく2007年には「第2回全国連携室ネットワーク連絡会」を山形県鶴岡市で開催し、現地事務局を務めたり、山形県全体の地域医療連携担当者と知り合うきっかけとして「山形県地域医療連携実務者協議会」を行ったりもしました。(第2回山形県地域医療連携実務者協議会は宮城で開催された第1回東北7県地域医療連携実務者協議会と共催)

(2)市民への啓発活動へも挑戦

医療・介護福祉従事者だけではなく、実際に医療やサービスを受ける側の市民に、自分たちが住んでいる地域の医療現状を知ってもらう必要性を感じていました。そこで、2011年度は病院や地域の現状をお知らせする機会として市民向けへの啓発のため、2011年度山形県地域医療再生計画推進事業を受託し、市民公開講座を4回開催しました。(表3)(図7)

開催月	開催テーマ
2011年 9月	病院を知ろう
2011年 10月	診療情報共有システム「ちょうかいネット」について
2011年 11月	在宅医療と関係職種の連携 タウンミーティング
2011年 12月	自分らしく過ごしていく為に

表3



図7

初めての取り組みでしたので集客には苦戦しましたが、この活動は2012年度も受託し継続しています。地域の医療を守るには市民の力は大切です。継続していく中で新しい何かが生まれてくれればと期待をしています。この取り組みは、庄内保健所から広報を始め多くの協力をいただいています。

4.これからの取り組み

2012年度は「在宅療養のための退院支援のスペシャリストの育成を行うべき」という話題がもちあがり、山形県在宅医療推進モデル事業「地域の現状を反映した効果的な在宅医療マネジメントの実践に向けた研修」を開催中です。こちらも初めての取り組みで、様々な方のご指導をいただきながら進めています。医師や看護師等の人材不足、病床や施設、在宅サービスの不足、高齢者や低所得者の増加など、地域には難しい問題が多々あります。それでも専門職種が知恵を出し合い、解決に向けた実践につなげられる人間関係を構築する土台となるような場を引き続き提供していきたいと思っています。

5.最後に

このたびの応募にあたり庄内保健所 松田徹所長からいただいた「推薦文」に「医師不足に起因する地域医療への影響が顕著となり、一定水準の医療サービスを提供していくには、もはや個別の病院、地域の対応では限界が見えてきている。」とありました。まったくその通りで現場関係者だけで解決できる事は少ないのではないのでしょうか。所属施設や職種を超え、地域のすべての組織、もちろん医療やサービスを受ける患者家族、ご近所すべてを対象にした「理解と実践」が必要なのではないかと感じています。

任意の会のため微力ですが、皆で地道に活動が続けてきた結果、最近では認知度が出てきたように感じています。庄内地域では数多くの多職種対象の研修会が開催されています。当会の役割を検討しながら今後も庄内地域医療連携の会らしい企画で、活動を進めて行くよう努力いたします。